

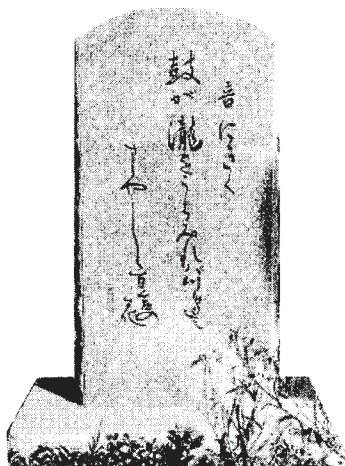
銀のスプーン

31集

銀のスプーン ペンクラブ

銀のスプーン

31集



銀のスプーン ペンクラブ

除幕された西行歌碑 川西市多田桜木一丁目



西行ゆかりの地に 「音にさく」歌碑

川西の公園で除幕

「音にさく」鼓ヶ滝をう
ちめれば 川辺にさくや
目吉の花」
平安時代の歌人西行が、
在の川西市でこの歌を詠ん
だとする言い伝えがあるこ
とから、市内の有志たちが
海に近い同市多田桜木一丁
目の下郷公園に歌碑を建て
て三日、除幕式をした。

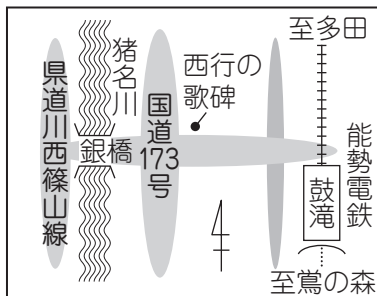
歌碑建立は、文芸雑誌

「銀のスプーン」を編集し
ている三宅晋弘さんらの
呼びかけで、市西土会市
文化協会の有志六人が委員
会をつくり、計画した。高
さ約一・八メートル、幅約八十
センチの調影石で、約百五十
万円をかけた。「西行ゆかりの
地」であることを市民に広
く知ってもらい、いずれば
観光資源の一つにと、願
いを込めている。

同時に、阪神大震災の悲
惨さを後世に伝えるため
にも歌碑を設立しようと、廣
汎なテーマにした協賛を募
集し、応募のあった三十六
首を歌碑の下にタイムカプ
セルに埋めた。西行の没後
九百年にあたる二〇〇九年
に掘り起こすであろうも
のだという。

代表世話人の森村勝雄・
市商工会会長らは「碧名
川の清らかな、ほだに咲
く花のかれんさを刻みさ
せ、当時の川西の光景を見
事に表した歌だ」と思っ
て話していた。

平成9年11月4日付・朝日新聞



まえがき

創刊二十三年を迎え、『銀のスプーン』はここに三十一集を出版することになりました。寄稿者の方々、出版を支えてくださった関係者の皆様、読者の皆様、これまで発行を支えていただいた先輩の皆様方に深く感謝申し上げます。

この二十三年の歴史を簡単に振り返ってみます。第一集は「だべりんぐ茶論」の会話の中から、昭和六十二年（一九八七）三宅啓正さんが発行・編集者として編纂されました。「自分と自分をとりまくナマの生活などを文とか詩歌、俳句として表現する、書きとどめることは、それが個人的なさやかな体験でもその積み重ねは国、民族、社会の歴史にもなる…」のまえがきで始まりました。この思いは今も受け継がれ、地域の文化、市民の文化として伝統を築いてきました。初めて文章を書いたとおっしゃる方、文章マニアの方、プロの方などさまざまの方が参加し、この思いを共有してきました。今後もし引き継がれることでしょう。

第一集から十集までは創世期としてその形を確立してきました。第一集は赤いハード表紙の箱入り、十四作品九十三ページでスタートしました。第二集からは、濃いブルーの表紙の並製

本、十八作品百九十五ページと倍増して、ほぼ今日の形ができました。

十一集から表紙はエンジ色となり、発展期といえるでしょう。特に十一集、十二集、十三集は阪神淡路大震災特集が生まれ、読売新聞を通じて反響を呼び全国から多くの投稿がありました。十二集は四十作品最高の三一〇ページに達しています。平成七年、八年、九年、十二年には年間二冊の発行が行われました。また発刊十周年にあたり西行歌碑（本扉参照）建立を提案し、大きな役割を果たしました。

二十集から二十九集までは表紙が茶色になりました。成熟の時期といえますが、一方で財政問題、三宅さんの病臥と、後任編集長問題（二十五集）など苦難の時期でもありました。多くの定期出版物が廃刊される時代の中で、三宅さんの強い思いが出版を支えてきました。十九集から参加した共同編集者の恩田が二十九集から編集長を引き継ぎ、新しい体制に代わりました。三十集から表紙の色は環境の世紀を象徴する緑に変わり、継承の時代に入りました。京都にある共同印刷工業（株）に印刷をお願いし、同社自費出版事業部イーブックカフェ京都からの発行となり、さらに本の戸籍ともいえるISBNを取得できました。

これまでの発行日、参加者数、作品数、ページ数などの記録は巻末にあります。

三十一集は企画テーマを「昭和の記憶」と「環境の世紀」と設定しました。平成になって十二年、人口の約二十パーセントは昭和を知らない世代。まさに昭和は遠くなりにはけりです。特に戦後六十五年の今、戦争の混乱の記憶は忘れられようとしています。

今回は四つのセクションにまとめました。最初は「昭和の記憶」「環境の世紀」、二番目が「句歌」「生活」、三番目が「歴史」「旅行」、最後が「主張」「論説」。必ずしもこの範疇に入るとは限りませんが、編集者の独断でこのようにさせていただきましたことをお断りいたします。

昭和の記憶・環境の世紀 初参加の小嶋裕さん（ペンネーム空色宙平）は少年時代に出会った復員兵の記憶が宮本三郎展で蘇ったエッセイ。絵はがき二点、版權者の宮本美音子さんの許可を得て載せることができました。常連の前川晋さんは若き良き時代の想い出を二点。スウェーデンの速水妙子スヴェンソンさんの先輩で瑞雲寺住職の平出精擇さん、三宅さんの奥様の千鶴子さん、神戸で船会社の社長だった田中惇さんが初参加。折りしもコミュニティ誌「Community」二十、二十一号に「セピア色の写真が語る」として昭和の初期、雲雀丘の山の上にあった精常園・生成学園の記事が出たのを機会に卒業生や研究者の方々に投稿をお願いし、別宮靖敏さん、研究者の桐山直人さん、恩田が当時の様子を。環境のテーマでは編集委員の村山茂さ

ん。徳島木頭村長の時代に日本で初めてダム建設を阻止した藤田恵さんが小豆島に計画されているダムについて。丹波で有機稲作に挑戦した恩田が寄稿。

句歌・生活 速水さんの同級の増田末美さんが俳句とご自身の俳号について初参加。常連の大和斉さん、伊藤弘子さん、福中保江さん、三宅さん。中村幸男さんが前集に続き歳時記多太神社の森を。北上弘美さんが日常生活のなかからエッセイを四点。編集委員の芹生弘さん、小説家の田麿新さん。環境コンサルタントの福留正治さんが初参加。編集委員の池上正示さんが亡くなった友人を追悼。

歴史・旅行 郷土の歴史研究家で常連の菅原巖さんが、一月開催の五十周年を迎えた「だべりんぐ茶論」（巻末参照）での講演を。福中さんは俳人大江丸、田麿さんが姫路藩の百姓一揆、池上さんが清正公について。旅行記は二十七集から参加の泉屋洋子さんが西行とのつながりで河内の弘川寺について。前集に引続き、ミクロネシア連邦名誉領事荒木芳雄さん、スウェーデンから速水さん。高松直彦さんがパプアニューギニア旅行記の（下）を。

主張・論説 常連の千葉俊壹さん、牧彰さん。前集に続き神戸大学名誉教授の濱本純逸さんが鳥取での講演録を。エッセイスト磯田昇（ペンネーム桂木俊介）さんが十二集以来の参加で

政治問題を。九集から参加のテレビでもおなじみの弁護士相馬達雄さんが時期を得た中国の死刑制度について。中近東が専門のジャーナリスト平田伊都子さんがサダム・フセインの死刑にまつわる真実を。

寄稿は初参加六名を含む三十二名に達しました。この他にも参加予定の多くのペン友が諸般の事情や闘病のため寄稿を断念されました。療養中の方々の一日も早いご回復をお祈りします。

三十二集の原稿募集 引き続き原稿募集を行います。投稿規程は変わりません。気楽に参加いただきますようお願いしています。長編を歓迎しますが、参加料も嵩みますのでご相談ください。第一次締め切りを三月末に設定しました。企画テーマについては、提案をお待ちしています。

二〇一〇年十二月

編集長 恩田 怜

編集委員 芹生弘、村山茂、池上正示

目次

まえがき

昭和の記憶・環境の世紀

夜汽車の復員兵	空色宙平	12
没後三十五年 宮本三郎展に思う		
ある昭和の記憶	前川 晋	18
あの頃の私の思いと今の思いと		
伊勢への想い	前川 晋	22
昭和三十年代初期の追憶		
昭和の記憶	平出精擇	25
紙切れだった〃仮卒業証書〃	三宅 千鶴子	27
松本先生の昭和の記憶		
風見鶏の館について	田中 惇	30

精常園を省みて……………	別宮靖敏	32
戦争前後……………	恩田怜	38
少年期を生成学園、川西中学に通う……………		
生成学園小学校の沿革と資料……………	桐山直人	53
昭和の時代に雲雀丘の山の上にあったユニークな私立小学校……………		
自然を意識して……………	村山茂	64
世界的な愚行 新内海ダム……………	藤田恵	66
丹波楽農日記（2）……………	恩田怜	71
有機稲作に挑戦する……………		
句歌・生活……………		
私の俳号はマドンナ……………	増田末美	88
飛行船（俳句）……………	増田窓女	90
一夏（俳句）……………	大和齊	92
はやぶさ（短歌）……………	伊藤弘子	94

老いの日暮らし（短歌）	福中保江	96
秋刀魚（短歌）	三宅啓弘	98
恩送りの森	中村幸男	101
多太神社の森 歳時記・七月		
小春日和	北上弘美	104
なごり雪	北上弘美	106
ノスタルジア	北上弘美	108
留守番	北上弘美	110
音楽への誘い	芹生弘	112
朝の万歩道	田摩新	115
『麗撃ち』（久保俊治著）と出会って	福留正治	118
牟田茂子さんのこと	池上正示	129
歴史・旅行		
猪名川の黎明	菅原巖	134

俳人大伴大江丸との接点……………福中保江 144

甚兵衛さん、ありがとう……………田 靡 新 147

『播磨寛延一揆』余談

坂本龍馬と清正公……………池 上 正 示 156

加藤清正公第四百遠忌に寄せて

河内 弘川寺に行く……………泉 屋 洋 子 160

ミクロネシアネシア連邦は近くなる……………荒 木 芳 雄 164

ボンベイ国際空港新装オープンングに向けて

スウェーデン便り(2)……………速水妙子スヴェンソン 167

ヴィトフェルトスカ高校、世界マスターズ水泳大会のこと

懐かしのパプアニューギニア(下)……………高 松 直 彦 177

主張・論説

〃座右の銘〃との出会い……………千 葉 俊 壹 200

ここがヘンだよ！ 日本人……………牧 彰 207

日本の常識は、世界の非常識

育てたい人間像……………濱本純逸

教育振興尚徳会鳥取支部二十一年度講演会から

声なき声……………桂木俊介

ガラパゴス諸島から一刻も早くテイクオフしよう

中国の死刑制度……………相馬達雄

二十一世紀の魔女裁判……………平田伊都子

サダム・フセインはどのように裁かれて逝った

あとがき

西行歌碑、だべりんぐ茶論五十周年・大震災十五周年

寄稿者紹介

211 227 237 240

昭和の記憶・環境の世紀



夜汽車の復員兵

没後三十五年 宮本三郎展に思う

空色 宙平

敗戦後、中学生の私は初めて一人で旅をした。宇和島の近くの吉田という処に疎開していた私と同じ年の従兄弟から、戦争が終わったので戻るまでに一度来ないかと便りをくれたからである。西宮の私の家は空襲で焼かれ、千里山の伯母の家に寄寓していたが、神戸から汽船で四国の高浜まで行つて汽車に乗った。戦争が終わつて十カ月経っていたが、瀬戸内海のあちこちにはまだ沈没した船がそのままになっていた。

三日ほど滞在したあと、帰りは神戸まで戻るといふ従兄弟と一緒に戻った。夕方高松から連絡船に乗り、夜汽車で神戸に向かった。当時の列車は、それこそ超満員、トイレも洗面所も人が乗ってかたっていた。私たちは早く乗車したので、なんとか座れたが、すぐに乗り降りも出来ない状況になった。途中の駅では、若い女の人が窓から必死の形相で乗り込んできた。通路もすき間がなく座席も三人がけになった。私の前に復員服の男の人がいて、どこまで行くのかと聞い

てきた。そして、自分は内地に帰ってきたばかりだといった。まだ戦争しているような精悍な面構えをしていた。「どちらに行っておられたのですか?」「最初はマレー半島、そして昭南島(シンガポール)、それからフィリピンだよ」「山下將軍と一緒にのルートですね」「そうだよ。

最初から將軍と一緒にいたのだ。あの開戦の十二月八日は緊張したな」。彼によると、アメリカ・イギリスとの開戦日の午前一時過ぎマレー半島東岸沖には、日本軍の船舶が集結していた。「信号はまだか?」。山下將軍が重々しく彼に聞いたという。

やがて「ヒノデハヤマガタ」という、開戦を告げる暗号が入った。午前一時三十分、マレー半島北端のコタバルへの上陸作戦が開始された。「これは『ニイタカヤマノボレ一二〇八』の真珠湾攻撃より一時間二十分も早かったのだよ」と彼はいった。砲爆撃をしないで、いきなりの上陸に激しい戦闘が続くなか、山下將軍の部隊はタイ王国のシンゴラとパタニに上陸し、タイ領内を通過、そしてマレーのイギリス軍国境陣地を交戦の上突破した。

上陸から五十五日間、九十五回の戦闘の末、日本軍はイギリス軍をシンガポールに追い込み、マレー半島南端のジョホール・パルに達した。海峡をわたりシンガポールへ上陸後も激戦が続いたが七日目になり、あの有名な山下將軍とパーシバル司令官との会見があった。私は聞いた。

「イエスカノーか？」と将軍が強く降伏を迫った会見ですね」「あれは台湾出身の通訳がいたが、意味が解りにくくて、迫ったというより将軍は相手の降伏の意思を確かめたのだよ」

シンガポールは日本の統治となり、昭南島と名前を変えた。イギリス軍の捕虜は十万人いたが、このとき残された食料は美味しく充分にあった。これを「チャーチルの給養」と呼んでいた。「それからどうされました」

「マニラにわたり、やがてアメリカ軍の上陸を迎えた。山下将軍は住民を戦乱に巻き込むことをさけ、ルソン島の山中に移った。戦局が厳しくなるにつれ、地元ゲリラも蜂起して攻撃してきた。兵站が途切れ、マリアアや飢えに苦しんだ。そして最後は地獄だった」

彼の表情が急に変わり、それからは黙り込んでしまった。満員の夜汽車は、ごとんごとん物憂く走っていた。車内の人いされの中で、従兄弟は深い眠りにおちいていた。

平成二十二年のはじめ、私は神戸市立小磯記念美術館の宮本三郎没後三十五年展で、戦時中最高傑作といわれていた『山下・パーシバル両司令官会見図』の山下将軍に出会った。そして将軍の迫力ある顔つきから、あの夜汽車の復員兵との話を、まざまざと思い出した。

日本が敗れ、このシンガポールの会見から三年七カ月後、山下将軍はフィリッピン・ルソン島北西部のバギオで現地連合軍に対する降伏文書に調印した。そのとき、パーシバル司令官もその場に立ちあつたのである。山下将軍は自刃も考えていたといわれている。しかし、未だ山中にこもり戦っている日本兵を一人でも生かして帰すには、まず自分が正式に降伏し早く戦いを止めるべきだと語つたとされる。日本軍の犯した住民虐殺などの罪を問われ「知らなかったが、司令官として責任は認める」と潔く昭和二十一年二月二十三日絞首刑に処せられた。六十歳であつた。

彼は二・二六事件で青年将校を支持したことから、陸軍統制派の東条首相から疎まれ、在外勤務に追われた。最後に「兵はまさしく凶器であり、大きな罪悪である」という言葉を残している。彼の遺言は

①日本人の道義的判断力・義務履行力の向上、②日本の科学教育の向上、③女性の地位・教育の向上などを長文で訴えていることで有名である。

画家宮本三郎は従軍し、傑作といわれた戦争画を残したことから、戦後「自分も戦争犯罪人だ」と語っていたと伝えられている。そして、『死の家族』という作品で、山下将軍かまたは

同時に処刑されたマニラ憲兵隊長大田清一中佐らしいといわれている横たわる死者を描いた。

その後は裸婦・花・舞妓などの女性の画に専念した。

宮本三郎の戦争画の中にも、戦争の鬼気迫る悲惨な情景を描いた作品もある。それは『飢渴』と題して、負傷した左腕を包帯で下げた兵士が這いずりながら前進しようとして、その悲壮な顔が水たまりに映し出されるという画だった。

私は美術館のその画の前に立ちすくんで、夜汽車での復員兵の「最後は地獄だった」という言葉の意味を改めて考えていた。

(平成二十二年三月四日)



「山下・パーシバル両司令官会見図」昭和17年 宮本三郎画伯



「飢餓」昭和18年 宮本三郎画伯

© Mineko Miyamoto 2010/JAA1000156

ある昭和の記憶

ゝあの頃の私の思いと今の思いと…

前川 晋

♪しのび会う恋を つつむ夜霧よ ♪知っているのか ふたりの仲を…

懐かしい石原裕次郎の歌声が囁くように聞こえてくる。静かに、暫し私は手を止めて聞き入る…。そしてまた次の曲の前奏に移って、静かに、あの裕次郎が囁くように…唄うのだ…。

♪生命に終わりがあゝる 恋にも終わりがくる 秋には枯葉が 小枝と別れ タベには…
♪追わないで！ 追わないで！ 粹な別れをしようゝぜ

昭和四十年代の初め頃、三十歳代半ばの私は毎晩のように得意先の接待に明け暮れていた。酒もダメな私が、北新地の「M」とか「G」、また南の「O」や「G」などのお店で、そのの

ホステスやママに助けてもらいながらの客接待なのだが、その頃有線から聞こえてくる歌声には裕次郎の唱も結構多かった。

四十年不況を脱して国内景気も回復し上昇しつつあったが、大阪万博を目前に控えて、大阪の景気が鰻のほりの頃だから会社の業績も好調、だから客先との酒席も随分多かったわけだ。

まだカラオケなどが出現する前で、ピアノの生演奏が主体の店が多かった。午後八時頃になるとお店へピアノストの先生が登場して2、3曲演奏の後は、そこのお店のおネエサマが唄う。そしてその後が、お客の唱に先生が合わせてくれて何人かが唄う。客の唱には裕次郎の唱も多かった。

狭いフロアで客もホステスと組んでダンス。キャバレーならフロアも広いので、時には素晴らしいダンスを披露するカップルも見られたが、多くは「語らいダンス」とチークダンス。特に狭いクラブとかバーでは一組二組がやっと組んで身体をゆすっているだけだ。

今思うと、その頃の私は客の接待とはいえ、また酒が飲めないとはいえ、こんな機会を結構愉しんでいたようだ。別に明日がどうなるとか、来年はこうするとか、私は余り考えてはいなかったと思う。

万国博の昭和四十五年はまさに景気の絶頂期だった。

支店のある本町駅では、私の朝の出勤時から、乗り換え客の混雑振りは異常なもので、開通したばかりの地下鉄中央線本町駅から御堂筋線への、乗り換えに押し寄せてくる人々は文字通り「群衆」という感じ。そして彼らの姿は一目で万国博観覧にやってきた人々だと判った。この頃の毎朝の出勤時の混雑振りには、今思い返しても日本人の熱気が地下一杯に横溢していた。いや地上にも、そして大阪中にも。毎朝毎朝会う人々の顔にも歩きにも、チカラが感じられたし顔は希望に輝いていた。

この様な熱気が全く無くなってからもう何年も経つ。私は今、「日本中何処を探しても熱気とか、希望に輝く顔などは、なくなってしまった」とさえ感じている。超高齢化日本の今の社会には、如何に力がなくなっただのか、熱気が失せたのか。「衰退していく社会というものは、こういうものなのだろうか?」。「国が衰亡に向うという風景はこれなのか?」という感じさえ、してならないのだ。

当時でも、四十年後の日本が高齢化社会になるという予測はもちろんあったと思う。しかし人間の知恵の浅はかさというべきか? 或いは三十年、四十年先の社会をイメージせよ! とい

うこと自体が、どだい無理な事なのだろうか？ 私は、日本の年寄りの一人として、ただただ無力な自分を感じているだけに過ぎない。しかし、いつの時代でも、またどの国にも次世代の人間はいるし、若者もいるわけだ。

そこで今、私は今の日本の若者達に聞いてみたい！

「若者よ！ 君達の明日は一体どういうイメージなのだ？」

（平成22年1月20日・記）

伊勢への想い

昭和三十年代初期の追憶

前川 晋

鈴鹿山脈は伊勢・近江の境を南北約三十キロにわたって連なる山並みである。北から御池岳・藤原岳・竜ヶ岳・釈迦ヶ岳・国見岳・御在所山・入道ヶ岳・鎌ヶ岳と高さ1200mから900mの峰峯が続く。

また北隣の養老山地との間の鞍掛峠から始まって治田峠・石樽峠・八風峠・国見峠・武平峠・水沢峠・石水溪・鈴鹿峠と、何れも古来から伊勢近江の国境をなし、人々が往来してきた由緒ある容姿のすぐれた山脈である。

昭和三十年代初期、入社間もない私は誘われるままに鈴鹿の山登りに精をだした。ハイキングは子供の頃父について六甲山界限などを歩いたし、また戦後は九州佐伯の高校時代に登山部で九重山登山の経験もしたので、歩きには多少自信はあった。会社に山岳部がありテントやコッフェルなどの道具も揃っていたし、仲間がいたので鈴鹿の山歩きに魅かれたのは当然の成り

行きであった。当時は土曜日も出勤日だったから日曜祭日だけが休日、安月給の新米社員とつてのレジャーには山歩きが適当で、それに当時の寮母さんが料理上手で律儀な人だったし、弁当作りを気持ちよく引き受けてくれたことも幸いした。

鈴鹿山脈の最高峰は御在所山である。海拔1212mで四日市市街から真西にあり、当時から山麓の湯ノ山温泉駅まで諏訪駅から近鉄電車の支線が走っており、登山者はこれを利用した。この主峰は鈴鹿山系登山では最も人気の高い山で、登山路も表道・中道・裏道の三本があり、表と裏が尾根道、中が澤登りの登山道で私はこの沢道の風情が特に好きだった。この澤が平野へ出て三滝川となる源流で、途中の藤内壁は岩登りのビギナーの練習岩壁として有名だった。私は山歩きの単独行はせず、いつも社内や税関などの登山愛好家の誰かと一緒だった。最初の頃は特に地名も知らず地理も判らないから当然だったし、かなり知ってから二人から数人の小グループが多かった。

昭和三十三年の夏には、山脈の北端・藤原岳から竜ヶ岳・釈迦ヶ岳・国見岳を経て御在所山までの尾根縦走を2泊3日、山岳部の原山リーダーに従う数名のグループに私も参加した。これが鈴鹿の山登りの私の圧巻といえる経験で、この完走が私の自信となって2年後の夏の立

山・劍岳登山完走が出来たのである。このほか御在所山の裏側の滋賀県域の雨乞岳へも登ったし、この時はこの二つの山の間を流れる愛知川^{えちがわ}でキャンプして不得意なアマゴ釣りにも興じた。昭和三十四年の秋、伊勢湾台風襲来の経験をした約一カ月後に、御在所山に登山した時の山頂から見た景色は今でも私にとつては忘れがたい光景である。山頂から真東を向いたその左手の方向に、一面キラキラと光る、新しい海^{うみ}を発見したような遠望風景。これこそが台風後一カ月余り浸水が退かなかった尾張平野南部の海部郡から津島方面へかけての浸水被害地だった。このとき私は自分の台風経験を反芻しつつも、新婚数カ月で台風罹災の犠牲者になったと聞いた知人に想いが繋がったのである。

頂上からの伊勢湾の展望は何時見ても素晴らしい景色だが、このときだけはさすがに胸のうちに鎮魂の想いを心に込めて眺めた景色であった。

(二二・五・十九 記)

昭和の記憶

平出 精擇

兵庫県水上郡（現丹波市）の風光明媚な山村で生まれ育った。生家は現在住職をしている小さな禅寺である。

昭和二十年に県立柏原かいばら中学校（旧制、現柏原高校）に入学した。その年の八月初めに、父が今年の施餓鬼会（十四日）には檀家の人たちに法話をせよと命じ、父自身がそのための原稿を作った。十二日まで毎日夕方になるとその演習をさせられ、十二日の夜、やっと「それでよい」と許してくれた。当日の法話が無事終わると、隣村の円悟寺の老僧に「明日のうちの施餓鬼会にも同じ話をしてほしい」と頼まれて引き受け、その上、維那いのう（お経の挙あげ役）までさせられた。

午後三時半ごろに儀式が終わって自転車で帰途についた。帰って分かったことは、その日に玉音放送があつて、日本が敗戦国になっていたことだった。そのころ、ラジオのある家は殆ど

なく、電話も村に一つあるのみだったから、ニュースも遅れて伝わっていたのである。

アメリカ兵が進駐してくると何をするか分からないという噂が流れていたから、急いでやったことは、二階の勉強部屋に上がって「英語」関係以外の本を全部紐で括って天井に抛り上げることであつた。そのころの中学の英語の担任は後に関西学院大学の教授になられた荻田庄五郎先生で、特に目をかけられていたから「敵国語」と言われて誰もが忌避した英語の勉強ばかりをやっていた私は、進駐軍がやって来ても何とかなると思つたのだらう。今になつても忘れられない、私の「昭和の記憶」である。

二十二年三月二十三日記

紙切れだったゝ仮卒業証書

松本先生の昭和の記憶

三宅 千鶴子

恩師松本昭次先生は、県立伊丹高校の普通科で商業を担当されていました。私は直接教えていただいていませんが、主人の啓正は就職コースの三年の時、商業簿記の手ほどきをしていたのだと聞いています。

八月のある日、一月四日以来寝たまま入院中の主人を先生は奥様と一緒に訪ねてくださいました。その朝、奥様から入院先などの問い合わせの電話をいただきました。教え子が恩師を見舞う話しはよくありますが、恩師が教え子の見舞いにお越しくださる話しはあまり聞きません。それに先生は昭和二年生まれのご高齢で近年ご体調がよくないと伺っておりました。そのうえ今年の暑さは格別で、箕面から川西までお越しいただけるとは思ってもいませんでしたので、主人が心待ちしないようにさりげなく伝えるだけにしました。

昼過ぎベッドでの昼食の介助がほぼ終わったころ、病室の入り口にご婦人の姿を見かけ、松

本先生の奥様と分かりびっくりしました。やがて松本先生が枕許に近づいて来られ、主人は顔を仰いで涙を流し泣き出しました。先生は手を掌に重ねて「三宅、三宅」と優しく声をかけて下さいました。

主人は長らくのご無沙汰を詫びました。それから在学中の様子など語らいが続きました。そして天皇陛下の御為ひいては家族、お国のため…と洗脳された十四歳、旧制中学三年生の少年であった先生には母上の心を察することも出来ず、志願兵として陸軍に入隊され、やがて古参、年長兵士たちに敬礼され、将校サーベルも誇らしく闊歩されていたところからの「昭和の記憶」をお話しされました。

昭和二十年二十歳の時、後になって原爆と知らされたそうですが、原爆投下直後の広島を目の当たりにされて愕然とされたそうです。

日本軍は中国大陸に侵攻することになったようですが、飛行機や船舶など足りなかったのでしょう、九州から島伝いに台湾に向かう途中、終戦となりその年の十二月に復員されたそうです。一面焼け野原の大阪に帰られ、上級学校に進学のため母校を訪れ旧制中学卒業の証明を請求されました。ところが中学校は三年中退で卒業証明は出せないとのことでした。そこで先生

は少年兵志願の際に受け取った仮卒業証明を示されました。しかし学校側はそれは陸軍が兵員集めのため勝手に発行したもので、学校としては何の価値もない紙切れでしかないと取り付く島もなかったそうです。その後、元の中学校に戻って卒業し、さらに高校へ進学されたそうです。大学に進学され教員免許を取得され、県立伊丹高校に着任されました。昭和二十八年四月のことです。伊丹高校には昭和四十六年まで勤務されました。主人は初めての教え子の一人であつたと話されました。主人は高校三年間を通じて満点を通せたのは国語でも社会科でもなく簿記一科目だけでしたので就活をやめて関大へ入学、産業能率短大では商工・販売を専攻しました。教員やゴルフ会社役員を経て、自分で始めた事業にも行き詰まり、浪人生活を余儀なくされましたがそんな折、新聞の三行広告を頼りに、現在の東亜経理専門学校の校長先生の面接を受け教員として採用されました。今も入学式などにお招きいただき厚誼をいただいております。

これらは、高校三年のとき一年間松本先生にご指導いただいたおかげです。本当にありがとうございます。とうございましたと申し上げておりました。

先生夫妻がお帰りになってからも主人の目には涙が溢れていました。

風見鶏の館について

田中 惇

今や神戸のシンボルになっている風見鶏の館は、昭和五十二年NHKの朝のドラマの主人公でありました。

この館の歴史を辿ると、明治四十二年ドイツ人建築家ゲオルグ・デ・ラランデ氏の設計で、ドイツ人の貿易商クリスラル・トーマス氏の邸宅でした。

わたしが入社した新日本汽船は、戦前は辰馬汽船で昭和十四年西宮本町から神戸の神港ビルへ移り、戦后に新日本汽船に社名変更しました。

昭和十四年頃に辰馬汽船の社長であった山県勝見氏がこの館に愛着を持たれ、辰馬汽船が買い取り、社内では館の東隣の北野神社に因み『天神寮』の名前で、戦后は社員の会食や行事などは二階の大広間でした。その後、昭和三十九年海運会社の集約があり社名は山下新日本汽船となりました。



そして昭和四十三年に風見鶏の館を中華同文学校へ売却するまで、約三十年近く船会社が所有していたことはあまり知られていません。館の内部の間仕切りなどは一般公開されていますので省略します。館の南側に萌色をした、ロシア人の長屋がありましたが、戦后年々取り壊さ

れました。北野坂を昇って行くと館の前は北野町広場となっており、なんだか風見鶏の館だけがぼつんと建っているように感じられます。古きよき時代の北野町界隈を知っている者にはとても寂しいですが、観光の名所として大いにPRしてほしいと思っています。

二〇一〇年九月記

精常園を省みて

別宮 靖敏

私の幼年時代、家族全員が虚弱な体質でした。私が五歳くらいの時、家族五名全員が大阪の桃山病院に入院し、無事退院した時は「奇跡の生還」というタイトルで新聞に出たそうです。姉が盲腸で入院した時も、危篤状態と親戚中が集まったほどでした。今では盲腸は風邪引きくらいの病気ですが、当時は医学の発展もなく大変だったようです。

それゆえ私の父は精常園の道父・別所彰善先生の大的ファンでした。当時、薬や注射で完治できない病気を治す名医として口コミで有名だったらしいです。私の家は大阪の材木町でカナダの原木を取り扱っていたようで、戦争もたけなわになり、大阪は危険と精常園に来るよう別所先生に薦められました。私は小学三年生の三学期の一月に大阪の小学校より転校しました。二人の姉はすでに生成学園の寄宿舎に入寮していました。私は虚弱な身体のため毎年夏休みに、は精常園の林間健康学塾に入塾させられ、小学校の時の夏休みの経験はありませんでしたが、

そんなわけで、転校時にはすでに十名ばかりの知った友だちがクラスにいました。

学塾の生活は、健康を維持するため朝はまだ薄暗い五時前に全員起床し、日中は全て裸足、猿股一枚で上半身は常に裸でした。朝一番に早速、山登りです。五月山より昇る朝日が見える「希望が丘」と名の付いた眺望の良い展望台で朝日を拝みます。そこは眼下に大阪空港が手に取るように見え、真正面には大阪城が一・五センチくらいの大きさに眺められました。また右前方は神戸の六甲山頂上の国旗掲揚台のポールが針のような大きさと肉眼で見えました。七時に全員で朝食ですが、パサパサの黒玄米食です。一口百回嚙むようにと、先生が椅子の上に立ち一から百まで数を数えるのですが、初めての馴れない者は口の中が空っぽになり口だけ嚙む格好をしていました。

不思議なことに夏休み林間健康学塾に入塾してからは風邪をひかなくなりました。病氣らしい病氣もしなくなりました。食後一時間は午前の勉強の時間です。

林間学塾は三週間約一カ月間生徒が預けられますが、その間に三回の遠足がありました。最初は小遠足と呼ぶ学校から箕面の滝まで往復徒歩です。二回目は大遠足と呼び学校より神戸の六甲山頂までの往復徒歩約四十キロメートルの大行軍です。この遠足は一班より三班に分かれ、

一班は往復徒歩、健常者成人向けでした。二班は阪急六甲まで電車で行き、駅より頂上まで徒歩です。三班は六甲まで往復電車で、頂上まではケーブルカーに乗り、虚弱者むきでほとんど歩きません。私は二班を希望しましたが、先生から強制的に堤氏とともに一班にやられました。何かと彼とは当時より良きライバルでありました。

一班行は戦時中の「歩け、歩け」の時代であって、予備のワラジを一足ズボンのベルトに止めて、夜の九時に帰校でありました。引率の先生が六甲山で道に迷い、西へ東へとずいぶん歩かせられ実質四〇数キロは歩いたそうです。夜、寢床に入っても足が右へ左へとまだ歩いていくような感覚でなかなか寝付けなかった記憶が残っています。

最後の終了前には豪華一泊旅行があり天橋立に行った記憶があります。

健康な大人・社会人も林間健康塾に入熟していて、北海道から九州まで全国から多数きていました。小学生も全国からの様々な人達で、江戸っ子・東北弁など混じり合っていました。遠くは韓国や「もうこ」などからも参加している寄り集まりでした。

林間講堂での講義は百畳くらいの大広間で座布団が沢山敷き詰められ、成人の入寮者達が沢山参加していました。午後は一時間、二時三十分ころまで毎日規則正しく昼寝の時間でした。

三時からは学校から徒歩二、三十分の処にある、山の湧き水を利用した巾十メートル長さ二十メートルのプールがありました。子供達全員入っても丁度くらいの広さでした。このプールの時間は暑い日射しの日は特に楽しい時間でありました。次は入浴の時間で女性の先生がシッカロールなどを首の廻りに付けて下さいました。

夕食はやはり玄米食で百回噛むことに決まっていました。食後は暗くなってから全員が講堂に集まり種々なレクリエーションをしたり、映画など先生に映写していただき、結構楽しいひと時を過ごしました。夜の山はなんと涼しいことか、夜はいつも爆睡でありました。林間学校の生活は以上のような繰り返しで、三週間目には懐かしい家族のもとへ帰宅するのです。暫らく振りで親の顔を見た時は、涙が出るくらい嬉しかった記憶があります。

道父の別所先生は昭和十六、七年当時より地球温暖化について警鐘を鳴らされ、山の自然や生物をいたわり、林の中の松笠一つ持ち帰っても注意されるほど自然を大切にされていました。年に二度は先生の講演があり、父に連れられ林間講堂で講義に参加した記憶が残っています。

自動車や電車の発達には特に懸念され、江戸時代のように東海道を徒歩で旅することを推奨されていたとのことでした。

ある時、蝮に咬まれた人が薬や注射で治療するのではなく、山の赤土に埋め、治したとの話を耳にしたことがあります。土中のバクテリアが毒を中和させたものでしょうか？

別所先生はなにか事を始める前には必ず黙想を勧められました。例えば食前の一分間必ず黙想をして精神統一するのです。山に登ったときも展望台の板が焼けつくような夏の暑い時も、全員正座して黙想するのです。精常園は病人を治療するのではなく、虚弱者を鍛え健全な身体にする処でした。虚弱体質であつた私の両親も精常園興成院に入院していました。興成院は成人向けの林間健康学校です。身体を鍛えるため連鍛という体操？、名は定かではありませんが、黙想の後、背筋をピンと伸ばし正座をして胃より下腹の腸にかけ腹式呼吸をします。林間講堂において入寮者全員がオルガンのドレミのド、ファイトのファー、ドー ファードーと音を合わせて腹に波を打たせるように、へこませたり膨らませたりする運動を繰り返すのです。六十年前のことなので定かではありませんが、私の両親も参加していたようです。

一方、生成学園ではよく勉強しましたが遊びも夢中でした。生徒達は始業二時間くらい前には競い合つて登校していました。登校すると即遊びでした。それくらい交友が楽しかったし、それを大切にしていたようです。大阪大国町より通学に二時間もかけて通学していた人もいま

した。全員、身体が大変良かったようです。現在よく耳にする生徒間の苛めっ子など想像もできないくらい仲良く楽しく遊んでいました。

生成学園の教室は前に長い長い廊下がありました。その廊下の奥まった端に講堂があり、一段と高くなったステージ風のフロアーでは、毎月発表会が父兄参観の上開催されました。発表会は日ごろ自主勉強したことを父兄に発表する会でした。廊下の並びは教室になっていて、床はコルクで造られていました。防音・断熱・通気性が良く、かなり贅沢な造りでありました。

この長い長い廊下の中央に職員室と南側に正門がありました。その向かいには、亡き友の奥田氏の家がありました。冬の寒稽古が始まるころには、私の友人たちは彼の家の暖炉で、始まるまでの時間、暖を取って待っていたようです。寒稽古は武術の剣道を習っていました。

他校の小学校では五年生位からの教科のものが、生成学園では幼稚園か一年生から教科に含まれていた記憶が残っています。

懐かしい精常園・生成学園の想い出です。